

芥川龍之介全集

第八卷

芥川龍之介全集

第八卷

芥川龍之介全集 第八卷

第八回配本（全十二卷）

一九七八年三月二十二日 發行◎

定價三二〇〇圓

著者 芥川龍之介 あぐたがわ りゅうのすけ

發行者 岩波雄二郎

發行所 〒101 東京都千代田區一ツ橋二十五
株式會社 岩波書店

電話 〇三六五、四二二
振替 東京六〇四〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

海のほとり	三
尼提	一六
死後	二〇
才一巧亦不二	二七
我机	二九
「蕪村全集」の序	三〇
「ふゆくさ」讀後	三二
病牀雜記	三五
「笑ひきれぬ話」の序	三八
「私」小説論小見	三九

瀧田哲太郎君	四六
夏目先生と瀧田さん	四九
瀧田哲太郎氏	五一
「新作仇討全集」の序	五四
澄江堂雜記	五八
夏目先生の書 霜の來る前 シルレルの頭蓋骨 美人禍 澄江堂 雅號	
一人一語	六三
拊掌談	六四
湖南の扇	七二
年末の一日	九〇
翻譯小品	九六
鴨 獵	九九
風變りな作品二點に就て	一〇一

身のまはり	一〇四
文章と言葉と	一〇七
虎の話	一〇九
病中雑記	一一三
二人の友	一二八
一人の無名作家	一二一
「輪廻」讀後	一二三
追憶	一二六
剛才人と柔才人と	一四九
横須賀小景	一五一
東西問答	一五三
カルメン	一五七
發句私見	一六一
近松さんの本格小説	一六五

又一説？	一六八
亦一説？	一七〇
嚙語	一七二
雲の峯	一七四
春の夜	一七五
點鬼簿	一八〇
島木赤彦氏	一八八
○君の新秋	一九一
夢	一九六
鴉片	一九八
槐	二〇三
久米との舊交回復のくさびに	二〇五
猪・鹿・狸	二〇六
凡兆に就いて	二〇九

悠々莊	二二一
彼	二二五
彼 第二	二二六
玄鶴山房	二三八
貝 殻	二六〇
文藝雜談	二七〇
萩原朔太郎君	二七七
或社會主義者	二八一
鬼ごっこ	二八四
僕 は	二八六
その頃の赤門生活	二九〇
藤森君の「馬の足」のことを 話せと言ふから	二九三
蜃氣樓	二九五

河 童	三〇六
芝居漫談	三七四
輕井澤で	三七八
都會で	三八二
注文無きに近し	三八六
少時からの愛讀者	三八八
小説の讀者	三八九
三つのなぜ	三九一
春の夜は	三九七
誘 惑	四〇一
淺草公園	四二〇
「庭苔」讀後	四三八
獄中の俳人	四四〇
食物として	四四四

今昔物語鑑賞	四四六
たね子の憂鬱	四五四
耳目記	四六二
僕の友だち二三人	四六四
「道芝」の序	四六七
無題	四七〇
素描三題	四七二
漱石先生の話	四七七
夏目先生	四八四
後記	四八九

小說
隨筆
八

海のほとり

一

……雨はまだ降りつづけてゐた。僕等は午飯をすませた後、敷島を何本も灰にしながら、東京の友だちの噂などした。

僕等のゐるのは何もない庭へ葭簾の日除けを差しかけた六疊二間の離れだつた。庭には何もないと言つても、この海邊に多い弘法麥だけは疎らに砂の上に穂を垂れてゐた。その穂は僕等の來た時にはまだすつかり出揃はなかつた。出てゐるのも大抵はまつ青だつた。が、今はいつの間にかどの穂も同じやうに狐色に變り、穂先ごとに滴をやどしてゐた。

「さあ、仕事でもするかな。」

Mは長ながと寝ころんだまま、糊の強い宿の湯帷子の袖に近眼鏡の玉を拭つてゐた。仕事と言ふのは僕等の雑誌へ毎月何か書かなければならぬ、その創作のことを指すのだつた。

Mの次の間へ引きとつた後、僕は座蒲團を枕にしながら、里見八犬傳を読みはじめた。きのふ僕の讀みかけたのは信乃、現八、小文吾などの莊助を救ひに出かける所だつた。「その時蜚崎照文は懷ろより用意の沙金を五包みとり出しつ。先づ三包みを扇にのせたるそが儘に、……三犬士、この金は三十兩をひと包みとせり。尤も些少の東西なれども、こたびの路用を資くるのみ。わが私の餞別ならず、里見殿の賜ものなるに、辭はで納め給へと言ふ。」——僕はそこを讀みながら、をととひ届いた原稿料の一枚四十錢だつたのを思ひ出した。僕等は二人ともこの七月に大學の英文科を卒業してゐた。従つて衣食の計を立てることは僕等の目前に迫つてゐた。僕はだんだん八犬傳を忘れ、教師になることなどを考へ出した。が、そのうちに眠つたと見え、いつかかう言ふ短い夢を見てゐた。

——それは何でも夜更けらしかつた。僕は兎に角雨戸をしめた座敷にたつた一人横になつてゐた。すると誰か戸を叩いて「もし、もし」と僕に聲をかけた。僕はその雨戸の向うに池のあることを承知してゐた。しかし僕に聲をかけたのは誰だか少しもわからなかつた。

「もし、もし、お願ひがあるのですが、……………」

雨戸の外の聲はかう言つた。僕はその言葉を聞いた時、「ははあ、Kのやつだな」と思つた。Kと言ふのは僕等よりも一年後の哲學科にゐた、箸にも棒にもかからぬ男だつた。僕は横になつたまま、可也大聲に返事をした。

「哀れつばい聲を出したつて駄目だよ。又君、金のことだらう？」

「いいえ、金のことぢやありません。唯わたしのお友だちに會はせたい女があるんですが、……………」
その聲はどうも耳にすんなりしなかつた。のみならず誰か僕のことを心配してくれる人らしかつた。僕は急にわくわくしながら、雨戸をあけに飛び起きて行つた。實際庭は縁先からずつと廣い池になつてゐた。けれどもそこにはKは勿論、誰も人かげは見えなかつた。

僕は暫く月の映つた池の上を眺めてゐた。池は海草の流れてゐるのを見ると、潮入りになつてゐるらしかつた。そのうちに僕はすぐ目の前にさざ波のきらきら立つてゐるのを見つけた。さざ波は足もとへ寄つて来るにつれ、だんだん一匹の鰐になつた。鰐は水の澄んだ中に悠々と尾鰭を動かしてゐた。

「ああ、鰐が聲をかけたんだ。」

僕はかう思つて安心した。――

僕の目を覺ました時にはもう軒先の蓑簾の日除けは薄日の光を透かしてゐた。僕は洗面器を持つて庭へ下り、裏の井戸ばたへ顔を洗ひに行つた。しかし顔を洗つた後でも、今しがた見た夢の記憶は妙に僕にこびりついてゐた。「つまりあの夢の中の鰐は識域下の我と言ふやつなんだ。」――そんな氣も多少はしたのだつた。

二

……………一時間ばかりたつた後、手拭を頭に巻きつけた僕等は海水帽に貸下駄を突っかけ、半町ほどあ

る海へ泳ぎに行つた。道は庭先をだらだら下りると、すぐに濱へつづいてゐた。

「泳げるかな？」

「けふは少し寒いかも知れない。」

僕等は弘法麥の茂みを避け避け、(滴をためた弘法麥の中へうつかり足を踏み入れると、ふくら脛の痒くなるのに閉口したから。) そんなことを話して歩いて行つた。氣候は海へはひるには涼し過ぎるのに違ひなかつた。けれども僕等は上總の海に、——と言ふよりも寧ろ暮れかかつた夏に未練を持つてゐたのだつた。

海には僕等の來た頃は勿論、きのふさへまだ七八人の男女は浪乗りなどを試みてゐた。しかしけふは人かげもなければ、海水浴區域を指定する赤旗も立つてゐなかつた。唯廣びろとつづいた渚に浪の倒れてゐるばかりだつた。蓑簾圍ひの着もの脱ぎ場にも、——そこには茶色の犬が一匹、細かい羽蟲の群れを追ひかけてゐた。が、それも僕等を見ると、すぐに向うへ逃げて行つてしまつた。

僕は下駄だけは脱いだものの、到底泳ぐ氣にはなれなかつた。しかしMはいつの間にか湯帷子や眼鏡を着もの脱ぎ場へ置き、海水帽の上へ頬かぶりをしながら、ざぶ／＼淺瀬へはひつて行つた。

「おい、はひる氣かい？」

「だつて折角來たんぢやないか？」

Mは膝ほどある水の中に幾分か腰をかがめたなり、日に焼けた笑顔をふり向けて見せた。

「君もはひれよ。」

「僕は厭だ。」

「へん、『嬌然』がりややはひるだらう。」

「莫迦を言へ。」

「嬌然」と言ふのはここにゐるうちに挨拶ぐらゐはし合ふやうになつた或十五六の中學生だつた。彼は格別美少年ではなかつた。しかしどこか若木に似た水々しさを具へた少年だつた。丁度十日ばかり以前の或午後、僕等は海から上つた體を熱い砂の上へ投げ出してゐた。そこへ彼も潮に濡れたなり、すたすた板子を引きずつて來た。が、ふと彼の足もとに僕等の轉がつてゐるのを見ると、鮮かに齒を見せて一笑した。Mは彼の通り過ぎた後、ちよつと僕に微笑を送り、

「あいつ、嬌然として笑つたな」と言つた。それ以來彼は僕等の間に「嬌然」と言ふ名を得てゐたのだつた。

「どうしてもはひらないか？」

「どうしてもはひらない。」

「イゴイストめ！」

Mは體を濡らし濡らし、ずんずん沖へ進みはじめた。僕はMには頓着せず、着もの脱ぎ場から少し離れた、小高い砂山の上へ行つた。それから貸下駄を臂の下に敷き、敷島でも一本吸はうとした。しかし